

花岡四郎さん

1922(大正11)年12月23日生

陸軍

所属 第10師団野砲兵第10連隊

戦地 フィリピン・ルソン島



昭和19年2月10日に現役兵として、姫路の野砲兵第十聯隊に入隊しました。数日後、北満のチャムスへ移動。以後8月の一期の検閲直後、動員下令、8月下旬チャムス出発。9月初め出発は、門司港でした。

予定ではレイテに送られる事になっていたそうですが、もうこの時点レイテへいく船がなくなっていたそうで、ルソン島防御に変更になり、マニラからルソン島北端のアパリに通じる最重要の5号国道の中で、中部ルソンと北部ルソンを分かれる分水嶺に当たる標高約千メートルの地点バレテ峠が私たち野砲兵第十聯隊の砲陣地となり大砲を収める壕を作ったのですが、この一帯は太陽の光が地表に届かぬほどの密林で、人が歩くと足跡に夜光虫がキラキラと光って、生まれて初めて見る不思議な光景に見とれたものです。

しかし、3月初めより始まったバレテの砲撃戦は、我が軍の射弾一発に対して、米軍の砲撃は4、50倍程度の激しさ。これに加えて、毎日、朝昼夕刻前の3回、2から3編隊のグラマン、双発双胴のロッキードの空襲と、10日に1回程度にボーイングB24の5百キロ爆弾の攻撃で、砲陣地周辺の密林も、4月中旬には立っている樹木は1本もなく、開墾されたような状態になってしまいました。

米軍は戦車と十輪の兵員輸送用トラックで3月末までにバレテ峠の鉄兵団を壊滅させる予定だったそうです。我々の頑強な抵抗で、5号国道突破をあきらめて両側の山をブルドーザーで戦車が通れる道を作りながら攻めてきました。米軍は山林地帯に侵攻する兵員には空から落下傘で武器弾薬、食料水まで投下しながら攻撃。一方我が軍は2月ごろより片手に1杯の粃が1日の食料ですが、そのあたりの雑草とってきて粃すりした片手半分程度の玄米を雑炊にして飢えをしのぐ有様でした。

4月19日我軍が総反攻するという命令が下ったのですが、発射できる砲は、私の所属する第4中隊第1分隊の砲が一門だけでした。普段ですとこの時期砲弾の不足のため、朝と夕刻、敵に我が軍の陣地には未だ大砲があるぞ、と知らしめるために、毎回、4、5発だけの射撃に止めておりましたが、総反攻との事で砲側にある36発の内35発を発射し最後の一発を砲に装填した直後、米軍の長距離砲の直撃を壕の入り口に受け、私はそのまま気を失い野戦病院に搬送されて、翌日目覚めました。

このとき、石倉分隊長他2名戦死。3名負傷でした。5月下旬後方、オリオン峠へ転進の命令で、陣地脱出。食料補給がまったくない飢餓街道を何十人とも知れぬ死体を見ながら、米軍に見つからぬ様に、夜間だけの行軍でした。9月14日キャンガンにて武装解除となりました。

復員後に知ったのですが、4児の父でした私の長兄が34歳でフィリピン島のブンカンで、2月28日戦死しております。数多くの戦没戦友や、米軍の戦死者、フィリピンの百万ともいう犠牲者に対して、慰霊の志を忘れずに、毎日を過ごしております。

(2016年9月4日 あの戦場体験を語り継ぐ集いより)